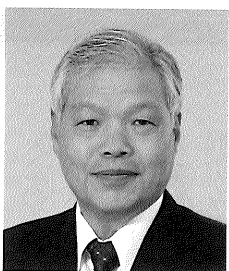


# 陽はまた昇る

学園理事長 小林 素文



今年は平成最後の卒業式です。平成元年に卒業した人たちは、今四〇代後半となり、人生で一番忙しく充実した日々を過ごしておられることと存じます。平成最後となる今年の卒業生

もまた、それぞれの希望を抱き、新しい時代へと羽ばたいていかれるでしょう。

\*

三一年前、昭和から新しい元号へ改元されたとき、「地平らかにして天成る」の願いをこめ、平成と名付けられました。

「地平天成」とは、「万物が榮え、世の中が平穩に統治されていること。または、天災などに見舞われることなく自然が穏やかなこと」(四字熟語辞典 ONLINE)です。

この願いにもかかわらず、平成には大きな、天災があり

ました。

まず、平成七年の阪神大震災。

「典型的な直下型地震で、死者六五〇〇人、負傷者四万人以上。家屋の全半壊及び焼失二五万戸以上のほか、JR新幹線の高架線はじめ各種鉄道・高速自動車道等の寸断という大被害をもたらした」(大辞林第三版)

地震が起きた早朝五時四六分、まだ寝ているときに、フワとした揺れを感じ、夢なのかと思いましたが、起きて見たテレビに目がくぎづけになりました。その痛ましい映像は、今も鮮明に残っています。

次は、平成二三年の東日本大震災。

「本震はマグニチュード九・〇。東北地方の沿岸部では最高潮位九・三メートル、湖上高四〇・五メートルに達する巨大津波が発生した。(中略)死者・行方不明者は約二万九千人とされる」(デジタル大辞典)

本震が起きた午後二時四六分、理事長室で書類に目を通

していましたが、クラクラとめまいがした気がしました。その夜、テレビで刻々と流れる映像に心が痛み、涙が止まりませんでした。

そして、それに輪をかける事態が起きました。「地震発生後、福島第一原子力発電所において、放射線物質が漏出する重大事故が発生した。(中略)アメリカのスリーマイル島原子力発電事故を上回り、旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電事故に比べられる大事故となった」(日本大百科全書)

この映像も連日流され、さまざまな議論がかわされました。痛ましかったのは、原発付近の住民が、特別法により、慣れ親しんだ故郷を去っていく姿でした。

「天災などに見舞われることなく自然が穏やかなこと」との平成の願いはかき消えませんが、それにより、新しい動きが生まれました。

阪神大震災直後から全国からボランティアが駆け付け、震災後一カ月間は一日平均二万人、震災後一年間では一三七万七千人が活動。『ボランティア元年』と呼ばれた。(中略)

ボランティア参加者の五〇%が二〇代、二三%が二〇歳未満だった。ボランティア体験が『初めて』と答え

た人は六九%。県外からの支援者は六三%だった」(日本経済新聞二〇一八年八月一八日朝刊)

ボランティアは、この時までには「一部の人々の特別な行為」や「自己犠牲的な行為」のイメージでしたが、何か手助けをしたい、との想いから全国から若者たちが集まり、懸命に活動していた姿は、被災地だけでなく多くの人に希望を与えてくれました。

阪神大震災をきっかけに、平成一〇年、NPO法(特定非営利活動法)が成立しましたが、そのNPOが東日本大震災では活躍しました。

NPOの活動は、瓦礫撤去や炊き出しなどの緊急支援、ボランティア・コーディネーションや組織支援などの中間支援、乳幼児支援や高齢者支援などの対人支援、仮設住宅支援やまちづくりなどのコミュニティ形成など、多岐にわたりました。

\*

大震災から八年、今も活動しているNPOを二つ紹介します。

一つ目は「桜ライン三一」で、東日本大震災で発生した津波の到達ラインに桜の木を植え、津波の被害と教訓を次の世代に残していく活動をしています。

津波最大到達地点は、ラインにすると約一七〇キロ。  
一〇メートル間隔で植えていくと、一万七千本の桜並木となる壮大なプロジェクトです。

プロジェクトを始めて七年たった二〇一八年三月末時点で、延べ四千人を超える植樹参加者が植えた、寄付による苗木は一四〇〇本以上になりました。しかし、それは、目標本数の八%にすぎません。

「苗木を寄付する」「植樹会に参加する」「サポーターとして応援する」などで、多くの人の支援を受けながら、これからも長く活動を続けていく想いを、『津波が来たら桜より上に逃げよう』（ネット）で次のように記しています。

「どうして手間暇をかけて桜の木を育てるのか」を後世に伝えることで、同時に津波の悲劇を伝えることができます。（中略）

きれいに咲いた花を見て、失われた命と、大切な人とのこれからを考える。（中略）

『後世に伝えたい』というそれぞれの想いがラインとなる桜。（中略）

一日もはやく、桜並木の下を歩いていたいですね。

二つ目は、今も継続されている「コラボスクール」です。宮城県女川町は、津波で家屋の約九〇%が被害を受け、

「和感」がない。（中略）もはや、向学館は緊急時の居場所ではない。利用する小中学生の割合はむしろふえている。（中略）あの日から蒔かれた種が、あちらこちらで花をつけ始めている。（ネット）『被災地女川より、違和感のそのあとに』より）

カタリバは、平成二八年六月から熊本地震で被災した益城町で「ましき夢創塾」を運営し、平成二九年一〇月には震災後に設立された中高一貫の福島県立未来学園に「双葉みらいラボ」を開設し、今も震災に関わっています。

さらに、震災だけでなく、虐待、貧困、母子家庭など環境に恵まれない子どもたちに、充実した放課後を提供しようと、東京都足立区の委託事業で「アダチベース」を平成二八年たちあげました。

ここでは都内という地の利を生かし、大学生インターンを多く採用しています。

アダチベースについて、責任者の加賀さんは次のように述べています。

アダチベースには我々職員だけでなく、地域の大人や大学生が出入りしています。彼らのような学校の先生でも親でもなく（タテ）、同じ視点になりがちな友達でもない（ヨコ）、子供たちにとって一歩先を行く先輩の

六割近い住民が避難所で暮らさざるをえませんでした。

狭い仮設住宅では勉強する場所もなく、外で勉強する子どもたちに、落ち着いて勉強する場所を提供しようと、放課後学校（コラボスクール）の設立をNPO法人カタリバは企画し、平成二三年七月、「女川向学館」がスタートしました。

向学館について地元の教員が二回レポートしています。

支援には大きく二種類あって、たとえば「花束」と「種」みたいな感じだ。どちらも必要、どちらもありがたい。カタリバは明らかに後者。向学館は瓦礫の中にカタリバが蒔いた種だ。

二〇一一年六月末、なんの確証をない中「女川の中学校の皆さん、放課後に来てください」という種が蒔かれた。（ネット）『被災地の教育現場 vol.10』より）

二〇一八年一〇月、向学館前の仮設住宅の解体が始まった。（中略）校庭や運動場に仮設住宅が立ち並ぶ光景には、当時かなりの違和感があった。（中略）カタリバは震災後の風景の中の『違和感』の一つだ。（中略）

先日、女川中学校の合同授業研究会に向学館のスタッフに参加していて、私も参加していたのだが、全然「違

ことを、カタリバでは「ナナメの関係」と言っています。その「ナナメの関係」にある人たちと、安心して本音を語ったり、ありのままの自分でいたりすることができると、心地よい関係を築けるよう心がけています。定期的に行われるワークショップでは地域の商店や企業の方をお呼びすることが多いです。今日も、地元の蕎麦屋さんに来て頂き、そば打ちの体験をしました。子どもたちには、いろいろな大人に出会い、地域で生きていく安心感を抱いてもらいたいですね。（ネット）『学校から飛び出して地域で挑戦』より）

カタリバの東日本大震災からの一連の活動は、社会が速く大きく変化している今、さまざまな環境にいる子どもたちにとって向き合ったらよいのか、との問いへの一つのヒントのように思えます。

\*

東日本大震災に心痛めたブラス界の大御所フィリップ・スパーク氏は、日の出する国（日本）を音楽で支援しようと楽曲『陽はまた昇る』を提供し、印税などはすべて寄付しました。

平成が幕を閉じようとしています。

どのようなことが起ころうとも、陽はまた昇ります。希望を抱き新しい時代を迎えたいものです。